

かんじま

歴史回廊

第10部・厳島の文化⑤

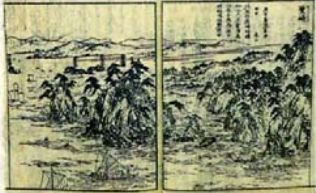
江戸時代の厳島では、蓬萊山に見立てられた「蓬萊殿」が霊跡地として注目された。この殿は島の北東端・聖崎のすぐ沖合にある。「厳島遊記」(一七〇二年)には御嶋廻りをする人々が目にする「勝れたる風景」として記され、「厳島図会」(一八四二年)には、写実的な挿画とでも二次のような説明がある。

「聖崎をはなれて海水のうへにたどり。殿上に古松数株ありて海風にもまれ、容姿おのづから造りなせるがごとし。世に画がくなる蓬萊山といふものに似たり」

■中国の伝説に由来

当時の人々が蓬萊山の絵に親んでいたことがわかる。京都画壇を代表する画家の一人、長沢蘆雪(一七五四―一七九九年)も「蓬萊山

土曜日に掲載します



「厳島図会」に描かれた聖崎と蓬萊殿(中央やや左寄り)

蓬萊山図 理想風景の画規範に

図を残している。一七九四年に有力商人である富士屋の招きで広島を訪れた際に描いた。松の並ぶ島山を指し、鶴と亀が海上を勢いよく進んでいる。中国の東海(不老不死の地がある)という蓬萊伝説が生み出したイメージをよく伝える作品である。

まず画としての理想的風景が存在し、それが眼前の景色を眺める人々のまなざしを規定する。中国・洞庭湖近くの「瀟湘八景図」を美の規範とし、日本各地に「八景」が成立した過程と同じである。

■まなざしの影響力

十八世紀後半のイギリスでも同様の現象が起きていた。理想郷とされたイタリヤの風景画を規範にして人々は自国の景色を眺め、「ピクチャレスク(絵のまじ)」な風景を求めて旅をした。理想とする風景画のどの要素を重視するかは両国において異なる。しかし、異国の風景画の受容を通して形成されたまなざしが、自国の風景の発見を促し、それを観光化させてゆくシステムとして機能した点は同じである。

今日の観光地の絵はがきをみれば、そのまなざしの影響力が現代まで続いていることがわかる。厳島図会や蘆雪の絵はこうした知と感性のありようをあらためて感じさせる。

(天野みゆき・県立広島大教授)